

モモ灰星病

発生生態

病徴

花、果実及び枝に発生する。

花では、花弁やがくが褐変し、軟化腐敗するが、やがてミイラ状となり、表面には灰褐色の分生子の塊が多数形成される。これを花腐れと呼ぶ（写真1）。果実では、初め小さな褐色の斑点を生じ、急速に広がり、果実全体が軟化腐敗する。病斑が拡大すると、果実の表面には、灰褐色の分生子の塊が多数形成される（写真2）。大部分は、収穫直前または収穫後の輸送中の熟果に発生する。



写真1 花での発生（花腐れ）



写真2 果実での発生

伝染経路

病原菌は、風または雨滴によって分散し、初めは、花に伝染して花腐れの原因となる。花腐れと枝梢病斑に形成された分生子が果実に伝染する。果実発病が見られると、病原菌密度が急速に高まって、二次伝染が繰り返される。

発生を助長する条件

病原菌は、10℃～27℃で繁殖し、20～25℃が適温である。この温度条件下で、多雨に経過すると発病が多くなる。

防除のポイント

- ・花腐れや被害果実の処理を適切に行い、病原菌の密度を低下させる。
- ・熟果は、病気にかかりやすいため、降雨の状況に応じて予防散布を徹底する。

参考文献

- (1) ひと目でわかる果樹の病虫害－第三巻－／社団法人 日本植物防疫協会

写真提供

- (1) 福島県農業総合センター果樹研究所